

## 発刊によせて

本学の東洋思想研究所と儒学文化研究所における一年間の研究成果を集約した論文集『研究 東洋』も、今回で第三号を数えることになった。本誌は、儒学を建学の精神に置く学校法人昌平黌の基本理念を踏襲しつつ、時代の課題と要請に応えるべく研究領域を東洋思想全般に求め、学内外の研究者の成果を盛り込んで発刊されてきた。有り難いことに、各方面からも概ね好感をもって迎えられたようである。今後も一層、内容面の充実をはかっていきたい。

第三号では、昨年六月に開催された本学の伝統行事「孔子祭」の記念国際シンポジウム「現代文明と東洋思想」を特集している。ここでは、中国の著名な哲学者である山東大学の傅永軍教授、日本で公共哲学の第一人者とされる東京大学大学院の山脇直司教授の御二方による、深い学識に基づく基調講演の内容を掲載した。また、シンポジウムでは、韓国の儒学研究の総本山とも言える成均館大学の要職にある二人の教授が発表を行い、国内外の第一線で活躍する研究者の方々から応答のコメントをいただいた。その模様も、極力臨場感を残しつつ、本号に収録している。儒学思想の現代的意義をめぐって、公共哲学、日本思想、地球科学等々の専門家が意見を交換した、一般向けにも興味深い内容となったように思う。

次に、投稿論文は三本を掲載した。宇野経済学の継承者である本学の石井前学長と、前述の傅教授、長く言語哲学を考究した東洋思想研究所の関沢研究員が、『論語』や儒者・知識人の役割、また近代日本の思想家を意欲的に論じたものである。その他、田久学長による中国口腔医学の発展に関する稀少な翻訳や、本年の大学祭で講演をいただいた思想家・松本健一先生の新著の書評等も収めている。

地球環境の変動、新興国の著しい経済成長、金融資本主義の行き詰まりなど、現代文明は今、大きな岐路に立たされている。二〇世紀後半から叫ばれ続けてきた我々の知のパラダイム転換は、いよいよ焦眉の急となった感がある。しかしながら、学問の世界では、いまだに専門分化の弊害が根深い。学際的で開かれた議論を旨とする本誌『研究 東洋』が、地球社会の到来にふさわしい新たな知の創出に少しでも寄与しうることを念願し、発刊の言葉とする。

平成二十五年二月吉日

東日本国際大学  
東洋思想研究所所長

松 岡 幹 夫